

- ◇古ノ学ブ者ハ己ノ為ニシ、今ノ学ブ者ハ人ノ為ニス (第7回例会報告) …………… 1
- ◇第2期第3回の報告を終えて (山本恵美子) …………… 2
- ◇印象記——「正しいなら、一人でも行く」者たちの連帯 (杉山雄大) …………… 4
- ◇講座第三期への積極的なご参加を！…………… 5
- ◇企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」のご案内…………… 5

古ノ学ブ者ハ己ノ為ニシ、今ノ学ブ者ハ人ノ為ニス

——「第七部 連環の章」山本恵美子さんの報告

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第2期第3回 (通算第7回) は、2019年9月21日に開催されました。「第七部 連環の章」〔第一 喚問〕から〔第四 ある観念連合〕までを対象に、HOWS 受講生の山本恵美子さんが報告を担当しました。討論のなかで、報告者の問題意識が鮮明でよかった、という発言があったように、山本さんの真摯な姿勢は「己ノ為ニ」の深層を掘り下げる有意義なものでした。その探究の足跡と踏み出された次なる一步は、「ニュース」今号掲載の「報告を終えて」を読むことでも理解されます。ぜひご一読ください。

今回の範囲における小説の現在時制は2月9日。東堂太郎は、堀江控置部隊長に呼び出され隊長室を訪れます。室内には堀江隊長と片桐伍長が待ち受けていました。かれら (主として片桐) は、東堂が使役の際に小手調べに「落書き」した二つの文章が、反戦的・自由主義的な思想の現れであるとして、問題視します。二つの文章とは、一つは芥川龍之介作『骨董羹 (こつとうかう)』、いま一つは田能村竹田作『群猿図』の「自画題語」からの引用であることが、間もなく東堂の口から明言されます。ここに「悪質転向者」片桐と東堂の対決がはじまります。

山本さんの報告の核心は、『山中人饒舌』の次の一文に集約され得るものでした。「古ノ学ブ者ハ己ノ為ニシ、今ノ学ブ者ハ人ノ為ニス。」(〔第二 歴世〕70頁)。この「己ノ為ニ」という竹田の行き方は、大西巨人の一貫した態度でもあったことを、山本さんは大西の批評文(「二つの体制における『特定の条件』抄」、『嵐が丘』に関する五つの断想)、「面談 長篇小説『神聖喜劇』について」などの紹介をとおして立体的かつ説得的に明らかにしていきました。

報告を受けてのちの討論では、やはり「転向」の問題に多くの時間が割かれました。まず片桐の「転向」、すなわち「『身』も『心』も『共に』」転向した人間の心性が考察されました。この種の転向者はなぜ悪質になるのか、それは確実に自己の転向の完了したことを権力者に信用してもらう必要があることが理由の一つとして挙げられました。次に竹田の「転向」、こちらは「建言」一件を竹田隠居の支配的な原因とみなすか、または従属的な原因とみなすかによって見方が変わることに、そのうえで、竹田の転向は「広義の転向芸文者」という言い方がなされてあること、しかもその語が肯定的・積極的な意味において用いられていることが確認されました。また二つの「転向」を対比としてつかまえ、その差異を際立たせるのは「己」の存否であるという発言も続けました。報告に触発されて出た意見と思われま

以上のような議論から、では「悪質転向者」片桐は、「それ以上の」人物・対象ではないのかという疑

問が提出されたことも興味深い観点でした。この参加者が注意を促したかったのは、片桐と東堂のあいだにある「一定精神機能上相似性」についてでした（〔第三 喚問（続）〕113頁）。この場面では、東堂によって、左翼の運動を担う者の陥る危険性が意識化されていること、その絶えざる意識化をとおして、新たな認識領会へ至らしめる可能性のあることが述べられました。

〔第四 ある観念連合〕では、斎藤緑雨の一節「君も人なりわれも人なり、同じなるべしとの意を、さる地方にての戯れ言に、おぬしとて穢多でもあるまい、おらとても大名ではない。」が報告者によって印象的に想起されました。「報告を終えて」に詳しいので割愛しますが、このような状態が無批判に前提とされた現実社会の途方もない時のただなかに、東堂の内奥で共振する、ある「激語」と「直言」は、『神聖喜劇』のダイナミズムを読者のまえに開示するようです。その驚異は、参加者の一人渥美博さんによって、ピチピチ跳ねる鮮魚の新鮮ささながらに、われわれに共有されました。これもまた生きた討論の楽しみといえるでしょう。最後に、当日の渥美さんの発言箇所を引きます。

――二月三日正午の宮庭における「おれたち土百姓」大前田文七の「揃いも揃うて底なしのアンポンタンが。そげなフウタヌルイことじゃけん、先祖代代から孫子末代まで、ただおさえつけられて這いつくぼうとるばっかりで、頭腰持ちやげる時節はなかとじゃ。」という激語と、竹田の「百姓は鋤鋤を取り申候て、至て卑賤の者と思ひ、又御上の御威光を挟み申候て抑へ申候へば、善悪共に百姓は恐れ入りて従ひ申者と思ひ、……百姓は一生田圃の中に年寄り申者と思ひ申候て、」という直言とが、百数十年の時のへだたりを超えて、私の中で共振するのを、そのおり私は、感覚したのであったが。……（〔第二歴世〕91頁）

第2期第3回の報告を終えて

山本恵美子（HOWS 受講生）

昨年九月に行なった報告の該当範囲は、第四巻収録の「第七部 連環の章」のおおよそ三分の二といったところである。片桐伍長、堀江隊長による尋問を受けた時の東堂の回想（「第一 喚問」「第二 歴世」「第三 喚問（続）」）のち、冬木の嫌疑について食堂で東堂が同期兵と会話をするシーン（「第四 ある観念連合」）へと展開する部分である。

そのなかでも、「悪質転向者」である片桐伍長との対決の最中に語られる田能村竹田のことを、どう物語と関連付けて理解すればいいのか。これは報告を終えた今でも難解な問題である。報告において私は、「己ノ為ニ」という文学者の態度を竹田の引用におけるキーワードに置いた。この考えは今も変わっていない。

「己ノ為ニ」は、作者大西巨人の一貫した態度でもある。当日のレジュメでも紹介したが、大西巨人は『人ノ為ニ』を排し『己レノ為ニ』を推す、ということは（中略）主体の倫理的態度として説かれたのではない。（中略）主体の『己レノ為ニ』という態度が現代現実を（正確十全に）補捉（表現あるいは説明）し得るからこそ（中略）それを推したのである」（『大西巨人文選3 錯節』みすず書房、34頁）と語っている。また別のところでは、「むろん竹田は、他者（享受者）無視の独善的な学芸上の在り方を是としたのではなく、他者（享受者）追従の売名的な学芸上の行き方を非とした」とし、「古ノ学ブ者は己ノ為ニシ、今ノ学ブ者ハ人ノ為ニス」という竹田の言葉を、「俗情との結託」を批判する言葉であると言い換えている。（『大西巨人文選4 遼遠』みすず書房、512頁）

竹田の隠逸は、客観的事実としては芸術家における転向と見なし得るが、それを東堂が「広義の転向

芸文者」と表し、さらにその語を肯定的かつ積極的に用いるのは、主観的――すなわち竹田の内面においては、「己ノ為ニ」文芸をなすことで現実世界を正しく表現するという態度が一貫していると考えからであろう。

この「己ノ為ニ」ということに関して、よりいっそう理解を深めてくれる一文をさらに紹介する。本講座のアドバイザーでもある立野正裕氏の近著『紀行 辺境の旅人』に次のような一節が出てくる。「宗教的なものにしろ藝術的なものにしろ、最初はエゴイステイクなものとして發現するこの自己救済のあこがれは、遅かれ早かれ、人間全体に対して関係を持たずにはゐない」（『紀行 辺境の旅人』彩流社、26頁）。孫引きで恐縮であるが、これは佐藤晃一による文芸批評「『永遠なる序章』その他」からの引用であって、その批評では『精神の氷点』も論じられていると著者は書いている。

「世界は真剣に生きるに値しない」「私は、この戦争に死すべきである」と考え、対馬にやってきた東堂の在り方は、隠逸した竹田とも重なる。東堂の「我流虚無主義」は、一切を投げ出すことをよしとせず、己を裏切ることをよしとすることができない。東堂の軍隊における闘争は、主観的においてまさに「己ノ為ニ」であるが、その態度がやがて同年兵のうちにも広がり、連環の兆しを見せていく。顕著なのは存在感を強める生源寺であろう。

もっとも連環の章では同時に、冬木の嫌疑に対する室町や村田、白水の言動に、部落差別の根深さを東堂は生源寺とともに痛感する。人は平等であること、差別は徹底的に不当であることを真摯な態度で論理的に室町らに説く生源寺だが、結局、室町らが腑に落ちるところまではいかにその場面は終わる。

部落差別に関して、緑雨全集の次の一節を東堂は想起している。「君も人なりわれも人なり、同じなるべしとの意を、さる地方にての戯れ言に、おぬしとて穢多でもあるまい、おらとても大名ではない」（174頁）。この言葉は、上と下の存在によって支えられている構造をもつ限定的な人間平等の在り方を語っているといえる。天皇制は、天皇の下において人は平等であるとするものであり、その構造は差別を内包している。したがって、天皇制という人間の不平等を是認する制度のなかにあって、さらには軍隊という場において、その内側から人間の平等性を説くことの限界に、東堂と生源寺は直面せざるを得ない。「君たちの認識は不当な差別でしかない。いや、もっと言えば、天皇という現人神が頂点に君臨する現在の日本の国家体制自体が、平等思想に反しており不当である」と本来は言わなければ、論理は完成しないであろう。「一寸の虫にも五分の魂」の気概でもって軍隊内で闘争する東堂の前に、現実が立ちはだかるのである。では、現実を突き抜ける可能性を秘めるのは何なのか。やはり論理であるのか。それとも、別の何かであるのか。続く第五巻において、追いかけていかなければならない問いである。

最後に、当日の報告で、竹田の建言書が実際には提出されなかったとの見方が近年の竹田研究では言われていることを紹介した。口頭で言及したのみだったため、参考とした論文をここに記載する。

杉本欣久「田能村竹田の山水画と作画精神」『古文化研究』(3) 1-55 (2004年)

また、杉本は注を付し、次の論文を参考文献として挙げている。

宗像健一「人間竹田―隠居に至るまでの歩み―」『開館五周年 田能村竹田展図録』大分県立芸術会館 (1982年)

宗像健一『大分県先哲叢書 田能村竹田』大分県教育委員会 (1993年)

山本さんの報告は、大西巨人の批評言説やインタビューでの発言を手がかりに、芸術創作における理念と東堂太郎の軍隊内闘争との関係性を浮きあがらせようとするものであった。山本さんは、『神聖喜劇』第七部「連環の章」第二「歴世」で、田能村竹田を通して引かれた「古ノ学ブ者ハ己ノ為ニシ、今ノ学ブ者ハ人ノ為ニス」(光文社文庫版・第四巻、70頁)という一節に注目する。巨人は「二つの体制における「特定の条件」抄」(『大西巨人文選3 錯節』所収)で、「人ノ為ニ」を排し「己レノ為ニ」を推す、ということは、竹田や白鳥やによって、主体の倫理的態度として説かれたのではない(もしくは、啻に主体の倫理的態度としてのみ説かれたのではない)。(中略)主体の「己レノ為ニ」という態度が現代現実を(正確十全に)捕捉(表現あるいは説明)し得るからこそ、竹田や白鳥やは、それを推したのである」と述べた。「主体の「己レノ為ニ」という態度が現代現実を(正確十全に)捕捉(表現あるいは説明)し得る」という理念は、山本さんが紹介したとおり、「俗情との結託」を排するためのものであり、また、巨人の思考を一貫する原理でもあったといえる。

巨人は「文芸における「私怨」」(『大西巨人文選1 新生』所収)で、「その対象・客体がどんな人事または自然であろうとも、それにたいする自己「私怨(憤怒、憎悪、不満、悲嘆、軽蔑など)」の普遍性を作家が確信することの上こそ、文芸(作品)は、成立し得るのではないか」「作家は、彼一己と私的・個人的・直接的には当面無関係な歴史的・社会的諸事象にたいしても、旺盛に各個「私怨」を激発して、主体的に格闘するべきである」と述べているが、ここでも「己レノ為ニ」表現を行う態度が、文芸創作上の理念として掲げられているといえる。注意すべき点は、その「私怨」を単なる個人的なレベルにとどまるものとしてではなく、普遍性を持つものとして表現する必要が説かれている点であろう。「己レノ為」の表現が、同時に「人ノ為」の表現と一致する地点にこそ、巨人の文芸創作上の理念があるとともに、俗情を排した自立的な主体による連帯のあり方が探られていたのである。山本さんの報告でも引用された「たぶん第二次大戦後に、ルイ・アラゴンが(中略)“(中略)万人の幸福と一人の幸福とを一致せしめること・そのために全力を尽くすことこそが、社会主義である。、”という意味のことを書いています。兵各個の疲労困憊汚辱などが、まさに着目せられねばならないのです。「万人の幸福のために各個人の幸福を犠牲にする」ような「主義」や「哲学」や「制度」やは、すべて悪であり不正である、と私は信じます」(「面談 長篇小説『神聖喜劇』について」〔『大西巨人文選3 錯節』所収〕)という巨人の言葉にも、それはあらわれているといえよう。また、独善的な振る舞いを拒絶しつつ、各個人の価値判断の一致する普遍的な地点を模索しようとする巨人の努力は、遵法闘争の限界の先へ踏み出そうとする東堂の言動ともつながるものである。既存の権威や権力を逆用することで、たたかいを有利に進めていくことはもちろん有益であるが、一方で、限界を抱えてもいる。その限界の先へ向かってたたかいを押し進めていくためには、既成の権威や権力を逆用することのできない“素手、や“生身、”の状態においても、正しいと思うことを率直に述べる大きな勇気が求められているといえよう。だが、そうした各個人の勇気を無謀な言動や犠牲へと直結させないためには、それら「正しいなら、一人でも行く」(大西巨人『深淵])者たちが連帯し、互いを守りあう必要があることを忘れてはいけないはずである。今後、読み進めて行く東堂のたたかいもまた、そうした展開を辿ることになるだろう。

山本さんの発表を通して、東堂のたたかい自体が「万人の幸福と一人の幸福とを一致せしめること・そのために全力を尽くすことこそが、社会主義である」という姿勢の実践であり、そのための欠かせない一歩として、「己レノ為ニ」という姿勢があることに気づかされた。

講座第三期への積極的なご参加を！

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」、いよいよ第三期が始まりました。第四巻後半および第五巻を読み進めていきます。剣韋摩り替え事件出来からの討議と実践との積み重ねによって、東堂と新兵たちが模擬死刑の午後における集団的な異議申し立てに至る過程、あるいは、教育期間を終えた東堂における回心の内実などについて、とうろんしていくことができると考えております。みなさんの積極的なご参加を呼びかけます。また、関心のある周囲の方にもぜひお進めください。今後の予定は、下記の通りです。

2月22日(土) 第八部 永劫の章(第一～第三) —— 軍隊内闘争の到達
報告＝伊藤龍哉(HOWS 受講生)

3月21日(土) 第八部 永劫の章(第四、終曲) —— 東堂太郎のその後
報告＝杉山雄大(HOWS 受講生)

企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」のご案内

大西巨人の歩みを『神聖喜劇』の成り立ちを中心に紹介する企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」が2月4日(火)から、二松学舎大学九段キャンパスで、また、2月21日(金)から東京古書会館で開催されます(開催日および開催時間は下記の通りです。開催期間などが会場で異なりますのでご注意ください)。これは、自筆原稿類を始めとする大西巨人の資料が二松学舎大学に寄託されたことを記念して行われるものです。メモ、草稿、覚書、原稿、ゲラ、手入れ本における加筆修正の痕跡からは、形式と内容との高次の融合を求めて飽くことをしらなかった大西巨人の持続的な意志が伝わってきます。2月29日には、関連イベントとして、大西赤人さんの講演も行われます。ぜひ足をお運びください。

会場：二松学舎大学 九段1号館地下3階 大学資料展示室(『神聖喜劇』を中心に)

東京古書会館2階情報コーナー(『精神の氷点』から『八つの消滅』まで)

期間：二松学舎大学会場 2020年2月4日(火)～3月14日(土) 10:00～16:00

閉室日[日曜・祝日、及び3/9(月)]

東京古書会館会場 2020年2月21日(金)～3月14日(土) 10:00～17:00

最終日は15:00まで

閉室日[日曜・祝日、及び3/9(月)]

関連イベント：講演会「父親としての大西巨人」大西赤人(作家)

2020年2月29日(土) 13:30～15:00 二松学舎大学 九段1号館2階201教室